

特集にあたって

有 満 保 江

本特集は、同志社大学人文科学研究所第16期（2007～2009年度）の第9部門研究会「ヨーロッパと日本における植民地主義と近代性：比較研究のパラダイム構築に向けて」の成果の一部である。この共同研究の目的は、近年注目を集めている〈植民地近代性〉を比較の視点から実証的に検討することである。当研究会では過去3年間にわたって、日本（朝鮮、台湾、沖縄等）とヨーロッパ（イギリス、フランス、オランダ、スペイン、ドイツ等）の植民地主義を専門とする研究者が集い、「教育」、「官僚制」、「衛生医療」などの具体的なテーマに沿って共同討議を重ねてきた。本特集は、共同研究の一環として開催された公開国際シンポジウムの講演原稿三篇とその解説文一篇、および共同研究員による論説一篇によって構成されている。

2009年6月27日に、同志社大学において「人種主義、植民地主義、多文化主義のポリティクス：オーストラリアと日本の経験」と題する、「多文化主義」を軸とする公開国際シンポジウムが開催された。このシンポジウムは、オーストラリア政府の機関である豪日交流基金の助成を受け、オーストラリア学会の主催、同志社大学人文科学研究所および現代アジア研究センターの共催によって開催されたが、当研究会が主に企画・運営に当たった。植民地主義が現代社会に及ぼし続けている影響、すなわち「継続する植民地主義」、について考えることはこの研究会の重要テーマのひとつである。とりわけ「多文化主義」を歴史的視座からの分析を含めて批判的に捉えなおすことは火急の課題であり、日本およびオーストラリアの状況についての学術的権威として知られるガッサン・ハージ（メルボルン大学）、テッサ・モーリス＝スズキ（オーストラリア国立大学）、塩原良和（慶應義塾大学）の三氏に御講演いただいたことは我々の研究にとってこの上なく幸いなことであった。三氏の講演内容および第9部門研究会による研究との関係については、司会を務めた共同研究員・板垣竜太氏（同志社大学）による解説文に譲るが、当日は述べ200名を超える参加者を得ることができた。特徴的だったのは研究者のみな

らず、学生や一般市民の参加が多かったことであり、このたび講演内容を活字化して公開できることは大変意義深いものと考えている。翻訳・掲載を許可下さったハージ氏、モーリス・スズキ氏、塩原氏に深く感謝する次第である。

共同研究員・岡本真希子氏（国立成功大学 [台湾]）による論説は、植民地台湾における「内地人」の政治・言論活動を扱った歴史研究であり、「植民地の支配者社会」をテーマに2009年8月に行われた第9部門研究会の例会での発表をもとに執筆されたものである。植民地研究において支配者（白人／日本人 [内地人]）の生活世界や政治・社会活動は長らく一つの盲点となっていたが、政治史の観点から台湾の内地人社会に切り込むこの論文は、比較の観点からみても非常に意義深いものである。尚、当初の予定では岡本氏の論文に加えて、研究会の成果としての論文を数篇この特集号に掲載する予定であったが、諸事情により変更となった。前号の水谷智氏による比較植民地主義に関する論説、また、次号に掲載予定の日本帝国研究の方法論についての論考（板垣竜太・戸渡秀明・水谷智各氏による共著）もこの特集との連続性を踏まえて御一読いただければ幸いである。